批評・紹介

John K. Fairbank and Albert Feuerwerker (ed.) *The Cambridge History of China*, volume 13 *Republican China 1912—1949*, Part 2

北村　稔

本書の巻頭に掲げられている總編集者（Fairbank と Denis Twitchett）の「前言」によれば、*Cambridge History of China* は全六巻のシリーズとして一九六六年に出版が計畫された。しかしその後の中國研究の發展に鑑みシリーズは全十五巻に擴大され、しかも文學史、藝術史、個別の經濟・技術史、および地方史などは含まれない。また本書の第一章であるフェアバンクらによる「序說」によると、全十五巻のシリーズのうち、第十巻から第十三巻までが、一八〇〇年から一九四九年までの一五〇年間をカバーしている。それゆえ第十三巻である本書は、いわゆる近代史部分の締めくくりにあたる。

本書の構成はつぎのようになっている。第一章は序章であり、一八〇〇年から一九四九年までの中國近代史が概說される。(Ⅰ)變化と連續、(Ⅱ)經濟の生長と變化、(Ⅲ)社會構造の變化、(Ⅳ)革命過程の國家と社會、この四つの部分にわかれる。さらにそれぞれの部分がいくつかの項目にわかれて敍述される。このあと第二章から第十四章において近代史の各分野が敍述される。さらに、各章ごとについての文獻解題を行う「文獻解題論文」が最後に配置されている。各章の紹介にはいるまえに、本書全體を貫く編集方針をのべておく。

本書の編集者であるフェアバンクとフォイアワーカーによる「第十三巻への序文」によれば、本書は專門家向けの部分と非專門家向けの部分からなる。すなわち巻末におかれた文獻一覽表と語彙解說および文獻解題論文は專門家向け。一方、本文と索引は非專門家向けだという。しかし本文には詳しい脚註が附いており、また語彙解題と索引が一まとめにされていることから分るように、專門家にも非專門家にも讀みごたえのあるように編集されている。巻頭には本文中に出現する十九枚の地圖と三一の圖表のリストが一括して示されており、これは甚だ便利である。地圖と圖表だけを、必要に應じてただちに利用できるからである。中國音のロマナイズは拼音字母ではなくウェード式によるが、これは圖書館のカタログがウェード式により蓄積されているという純技術的理由によると說明されている。しかし巻末にはウェード式と拼音字母との對照表が附いており、索引中にも表記上の顯著な相違については、兩者の對照例が示されている。

さて本文であるが、內容を基準にして大きく三つの部分に分けることができる。第一部を構成する第二、第三、第四の各章では、一九一一年から三一年までの中國をめぐる國際關係、および一九二七年から三七年までの國民政府と中國共產黨のそれぞれの動向が敍述される。各章の表題と執筆者ならびに敍述される項目はつぎのとお

り。

二　中國の國際關係――一九一一年から一九三一年

青山學院大學教授　衞藤　瀋吉

〔背景説明〕　東アジア地域秩序としての清帝國の衰退と崩壞

滿洲における日本勢力の擡頭

日本の二一箇條要求

日本の影響と第一次大戰への中國の參戰

ワシントン會議と中國

モスクワによる中國への二つの接近

中國の國民革命と列強

三　南京時期の國民黨中國――一九二七年から一九三七年

イリノイ大學教授　ロイド・イーストマン

最初の權力統一

各省での抗爭

蔣介石の政治的優位に寄與した要因

南京體制のイデオロギー、構造、機能

國民黨の派閥

國民黨體制の成果

中國の新しい空氣―一九三六年から三七年

南京時期の國民黨統治の評價

四　共產主義運動――一九二七年から一九三七年

ヨーク大學教授　ジェローム・チェン

再建と黨の指導性

階級構成

大衆路線

分派主義と離黨

地方ソビエトの樹立

一九二七年の蜂起

根據地の必要性

富農問題

査田運動

紅軍

戰略の探究

李立三路線

王明の〝二つの路線〟

ソビエトの崩壞

蔣介石の第五次作戰

長征

張國燾の離脫

〝白區〟での工作

劉少奇

第二次合作への準備

西安事件

ここにあげた三名の執筆者たちが、それぞれの分野での代表的研究者であることは言を俟たない。いずれも最新の資料と深い學識にもとづく論述が展開されている。

つぎに本書の第二部を構成する第五、六、七、八、九章を概觀し

てみる。これらの各章では、中國社會の主要側面すなわち經濟・社會・政府・教育・文學動向などが、これまでの研究上の成果や問題點を吟味しながら敍述される。各章の表題と執筆者ならびに敍述される項目は以下のとおり。

五　土地制度　　フーバー研究所　レイモン・マイヤー

土地問題の諸側面
生産市場と仲買市場
村落と家族
地方エリート
分割相續
家と收入
家と家の協同作業の形式
農業の商業化
專業化の增大
地域經濟の出現
農業危機
明確にされた危機
一九二〇年代
南京時期
戰時期

六　農民運動　　パリ高等社會科學院教授　ルシィアン・ビアンコ（ジャネット・ロイド譯）

地代と稅金に對する抵抗の發生
小作人と地主の鬪爭
抗稅爭議
阿片稅への抵抗
農民爭議の發生。その類型と特徵
地代と稅金に關連しない騷動とその類型
特徵
彭湃と海陸豐の農民（一九二二年―二八年）
他の地域の狀況とその後の展開

七　地方政府の發展　　ハーバード大學教授　フィリップ・クーン

地方政府におけるエリートの役割
諮議局と〝新政〟
地域體制
山西計畫
地方行政に對する南京政府の初期の政策
地方政府の官僚化
地方再建運動
政治參加と官僚制。その歷史過程

八　學術團體の成長―一九一二年から一九四九年　　ペンシルバニア大學教授　エトゥ・ゼン・スーン（孫任、以都はミドル・ネームか？）

近代的組織の出現―一八九八年から一九二八年
人材。海外で訓練をうけたエリート
大學。組織の創立

科學と研究における初期の主導性
基金の提供とアメリカの影響。「清華」
南京政府時期の高等教育と國家建設
中央政府の指導
高等研究
研究への助成
戰爭と戰後の變化——一九三七年から一九四九年
戰時の高等教育と研究
戰後の變化

九　文學動向。革命への道——一九二七年から一九三七年　シカゴ大學教授　李　歐　梵

三十年代文學——一九二七年から三七年
文學革命から革命文學へ
左翼作家連盟と文學論爭
前奏。魯迅對『新月』
〝民族主義文學〟の場合
〝自由人〟と〝第三種人〟の場合
〝大衆語〟と〝ローマ字化〟についての論爭
〝二つのスローガン〟の闘い
文學の創造性と社會的危機
雜文
小說
詩
演劇
戰爭と革命
〝民族的抵抗〟の武勇談
〝愛國者の血〟の文學
延安文藝座談會
延安文學
革命前夜——一九四五年から四九年

以上、本書の第一部と第二部に相當する九つの章を概觀したが、つぎに第三部に相當する第十、十一、十二、十三、十四の各章について述べる。

第三部のうち、第十章から十三章までは連續した內容をもつ。すなわち一九三一年の滿洲事變にはじまり、一九四五年の第二次大戰の終了まで續く日本の中國侵略と、これに對する中國側の抵抗が軸となって敍述が展開される。そして四六年から四九年までの國共內戰へと連續する。とくに第十一章から十三章においては、地圖や圖表が適切に配置されており、この時期の情況の推移が簡明に記述されている。まず、これまでと同樣に、第三部を構成する各章の表題と節ならびに項目を紹介しておく。

十　日本の侵略と中國の國際的位置——一九三一年から一九四九年　シカゴ大學教授　入江　昭

世界經濟恐慌——二義的な中國の存在
滿洲事變——日本の修正された軍國主義、一九三一年から一九三二年
國際主義の崩壞

日本による地域内協力獲得への試み、一九三三年から一九三七年
日中戰爭中の世界の勢力動向、一九三七年から一九四一年
第二次大戰中の中國と日本
大戰後の中國の後退

十一　日中戰爭中の國民黨中國——一九三七年から一九四五年
イリノイ大學教授　ロイド・イーストマン
初期の作戰と戰略——一九三七年から一九三九年
中國の戰爭動員
惡化——一九三九年から四五年の軍事
外國の軍事援助
日本の一號作戰
インフレの激化、工業部門
政治の衰弱

十二　日中戰爭中の中國の共產主義運動、一九三七年から一九四五年
スタンフォード大學教授　ライマン・ヴァン・スライク
Ⅰ　戰時初期、一九三七年から一九三八年
國民黨に對する態度。統一戰線
軍事戰略と戰術
指導者と指導性
日本の侵入と中國の最初の對應
根據地の形成
根據地の形成過程
Ⅱ　中間期、一九三九年から一九四三年
新四軍事件
日本の占領強化策
北中國での占領強化
百團會戰、およびその後の掃討作戰（一九四一年から一九四三年）
中部中國での日本の占領強化
共產黨の對應。生き殘りと新政策
陝甘寧における新政策
日本占領地域での新政策
Ⅲ　戰爭末期——一九四四年から一九四五年
一號作戰とその結果
政治的および軍事的擴張
合衆國と中國の共產主義者
第七回大會
中國の共產主義者とソ連
展望

十三　國民黨と共產黨の鬪爭——一九四五年から一九四九年
ユニバシィティ・サービスセンター（香港）　スザンヌ・ペパー
交渉とアメリカの介入
ハーレイ使節團——一九四四年から一九四五年
マーシャル使節團——一九四六年
國民黨統治の衰退
日本人からの接收
經濟的無能力——インフレ政策

一九四七年から四八年の緊急改革
政治的無能力——和平運動への誤った處理
共產黨勢力の成長
一九四六年から四九年の內戰
第一年目、一九四六年から四七年——撤退
第二年目、一九四七年から四八年——反擊
第三年目、一九四八年から四九年——勝利
國民政府の終焉とアメリカの政策の失敗
十四　一九四九年までの毛澤東の思想
ロンドン大學教授　ステュアート・シュラム
學生運動から農民運動へ、一九一七年から一九二七年
黨、軍隊そして大衆、一九二七年から一九三七年
民族的矛盾と社會的矛盾、一九三七年から一九四〇年
毛澤東の思想の勝利、一九四一年から一九四九年
結論——人民民主的な近代的獨裁？

以上、單に項目を羅列しただけであるが、お氣づきのように本書はあきらかに項目別の歷史事典の性格をもつように配慮されている。文獻解題も行う詳しい脚註と合せて讀むとなおさらその感を強くする。卷頭には各章の表題とその下の分類レベルである節の題目が示される。さらに節の中の小項目はパラパラとめくるだけで目につくよう本文中にイタリックで表示され、全體として一目で內容がわかるよう工夫されている。

つぎに各章の內容の紹介についてであるが本書は膨大な書物であり、各章のすべてにわたり詳しくコメントするのは紙面の都合からも不可能である。あえて、第三章の「南京時期の國民黨中國——一九二七年から一九三七年」と、第十四章「一九四九年までの毛澤東の思想」の二論文に焦點を絞りたい。蔣介石を柱とする國民黨の南京國民政府と、毛澤東を柱とする共產黨のソビエト政權は、中國近代史の流れを決定した二大存在であった。

さらに第三章が歷史學的アプローチによるものであり、第十四章が政治學的アプローチによるという、それぞれの論文のもつスタイル上の特色も選擇の理由である。このほか個人的な興味からのみいえば、私がつよくひかれたのは第八章「學術團體の成長——一九一二年から一九四九年」である。ここでは教育や學術の問題が、多くの研究書や資料を驅使して大變に要領よくまとめられており、私にとっては待望の一文であった。私は政治史を研究しており、教育史を研究するものではない。しかし清末以降の中國の政治變動を考えるには、教育と學術の情況についての的確な把握が不可缺である。なぜなら教育と學術の分野は、政治變革のオルガナイザーたちを生みだす母體であり、同時にまた、變動の結果として成立した新體制を支えるエリートを生み出す母體であった。さらに一九四九年の中華人民共和國成立後に、今なお未解決である知識人問題を生みだすことになる母體ともなったからである。

では、第三章「南京時期の國民黨中國——一九二七年から一九三七年」を詳しくみてみよう。

南京の國民政府を正當に評價しようという動きが近代史研究の分野であらわれたのは、管見の限りではメリクセトフの「中國における官僚資本（一九二七年——一九三七年の國民黨經濟政策と國家資本主義の發展）」〔ソ連科學アカデミー、一九七二年。邦譯は中嶋太

一譯、アジア經濟研究所、所內資料、昭和五〇年）を嚆矢とする。以來十六年、南京國民政府時期の各分野の研究が急速に進められているが、經濟分野にかんする研究が一つの大きな柱となっている。一九八〇年にはハーバード大學出版からParks M. Coble の *The Shanghai Capitalists and the Nationalist Government, 1927—1937* が出た。日本でも一九八一年に東大出版會から、野澤豐編『中國の幣制改革と國際關係』が出て、南京國民政府の經濟政策が個別のテーマごとに詳しく論究された。

著者は諸分野におけるこれまでの研究成果をふまえ、對象をきわめて要領よく解說している。

著者もいうように（一四七頁）、南京國民政府に對する評價は二分されている。一つは全面的肯定である。すなわち南京國民政府は中國の發展のために健全で強力な基礎をつくりあげていた、というものである。もう一つは全面的否定である。すなわち南京國民政府の指導者たちは直面する問題を理解せず、正しい政治經濟政策を遂行できず、その體制は腐敗して無力であったというものである。著者の立場は全面的否定ではなく、南京國民政府に何らかの積極的意味をみいだそうともしている。南京國民政府のさまざまな側面に光をあてて問題提起を行い、その上で否定的議論を展開している。

論文全體を貫いている著者の觀點は、南京政府は軍事力を基盤に成立していた軍事獨裁政權であるというものである。著者はこの觀點を種々の側面から論證しようとする。例えば一二四頁では國民黨と軍の關係について、つぎのようにいう。孫文の生前には黨→政→軍という上下の關係があり黨が軍の優位にたっていた。しかし一九二九年頃からこの關係は逆轉し、一九三五年には國民黨の中央執行委員會の43%は軍人であったと。そしてこの事實を、南京政權の軍事獨裁體質の證左とする。しかし軍人が前面に出てくるという狀況は國內の軍事對立の反映であり、南京國民政府に限ったことではなかった。

南京國民政府に對抗した農村根據地の共產黨勢力も、當時は本質的には軍事政權であり、共產黨は紅軍に寄生していたといっても過言ではない。たしかに共產黨は、黨が軍をコントロールするための軍事委員會と軍隊內の政治委員（コミッサール）制度を保全し、一九二九年の「古田會議決議」により、黨の軍に對する優位を確認していた。しかし共產黨政權の存續にとり軍事が主要な要素であり、紅軍が決定的役割を果していたことは明白な事實である。これによって形成された政權の性格は、軍に足場のない人間は眞の權力を維持できないという今日の中國共產黨內の現實にまでおよんでいる。そして毛澤東個人あるいは個々の軍事指導者への忠誠と、傳統的な農民の平均主義的思想が紅軍の精神的紐帶であった。

しかし共產黨の場合は、ボルシェヴィキ流の黨→政→軍という指導系統を理念と形式においてあくまで維持することが、コミンテルン直屬の世界共產主義運動の擔い手として認められる不可缺の條件であった。これがなければコミンテルンからも南京政府からも、紅軍の活動は單なる匪賊的な遊擊行動にすぎぬとそしられても辯解の餘地はなかった。實質はともあれ黨による軍の指導という形式を嚴格に維持することが、政治主張を有する自覺した集團としての體面の維持と、表裏一體をなしていたのである。

これに比べ國民黨側に、むき出しの軍事政權的性格がより強くみられるとすれば、國民黨が國共分裂後に、共產黨色を一掃する目的

で、國共合作後に導入していたコミッサール制度を廢止したこと（一九三二年には復活――一二三頁、註12、軍事委員會制度は一貫して存續した）、諸軍閥を懷柔するさい國民黨に入黨させることが懷柔成功の證しとなったことなどが考えられる。また指導者の蔣介石が軍人であったという事實も考慮しなければならない。

著者のいう孫文生前の〔國共合作中〕の國民黨の場合を考えてみる。當時、孫文は一九二三年以來廣東省中央部に軍政府を組織していた。そして自らは大元帥として形式的には諸軍閥を統率していた。しかしこの政權（軍政府、二五年六月まで存續）が軍事獨裁政權であり、しかも實權は孫文にはなく、楊希閔や劉震寰らの軍閥に牛耳られていたことは明白な事實である〔拙稿「第一次國共合作の展開について」參照（『史林』六六卷四號、昭和五八年七月）〕。著者のいう黨→政→軍などという上下の系統が機能していたとは思えない。たしかに一九二四年の國共合作により國民黨にボルシェヴィキの制度が導入され、蔣介石の率いる國民黨直屬の軍隊（共產黨の紅軍に相當）である、黃埔軍校を基礎とする部隊が出現する。そして當初はこの部隊でのみ、黨による軍の指導を目的とするコミッサール組織が存在した。しかしこの場合も、軍人がいわゆる「黨性」（すべての指導を黨に集中させるという觀念。のちに共產黨內で黨の指導をつよめるさいに確立した用語としてつかわれるようになった）を持つことを要求されたのであり、コミッサールの多くは、黃埔軍校の卒業生を含む軍人が任命された。黨の指導はあくまで理念であり、形式であった。

紙面の都合でこれ以上の檢討は控えるが、この問題は中國近代史の軍事的性格と深いかかわりをもっており、大いに議論すべきことである。著者はいう（一三六―七頁）、國民黨は組織機構を有したがこれを超越していた蔣介石個人が權力の源であり、軍のみが突出していた集團であったと。しかし蔣介石は個人的決定に對し表面上は黨決定という體裁を與えた。これにより黨は黨として存續できる條件を與えられたのだと。この議論は國民黨を共產黨におきかえ、軍の突出に程度の差を留保させ、個人と黨の關係について蔣介石を毛澤東におきかえても成立する議論ではあるまいか。

著者が南京國民政府に對し多くの側面から光をあてていることについてはすでに述べた。第一節〝最初の權力統一〟では、蔣介石の活動、これに對抗する李宗仁、白崇禧らの廣西派の動き、いわゆる國民黨左派である陳公博らを中心とする改組同志會の動向、舊官僚らの國民黨への入黨など、一九二七年の國共分裂後に蔣介石を軸にして展開した國民黨內の再編狀況が解說される。

つづいて〝各省での抗爭〟では蔣介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁、白崇禧らの軍人、さらには汪精衛、胡漢民を含む黨外の全國的なレベルの抗爭が敍述される。これまでこの時期に關しては何册か通史を讀んだが、本書の敍述がもっとも簡明であり著者の深い學識を感じた。複雜な權力抗爭の大筋と內實がぱっとつかめるのである。著者は蔣介石がこの抗爭に勝利した要因を以下のように分析する。第一に、黃埔軍校以來の子飼いの優秀な軍事力をもっていたこと。第二に、上海をおさえ資金が潤澤であったこと。第三に、當面の狀況にとり何が有利かを素早く判斷し、たくみな政略を行使して敵を一つにまとまらせなかったことであると。そして豐富な資金を買收に利用し、敵對する諸勢力のうえにまたがり一時的な均衡をつくりだすと。著者はこのような用語をもちいてはいないが、これはいわゆ

る「ボナパルティスト」である。續いてやがては分裂させ各箇撃破したと。さらにこれら三つの要素をつらぬいていたのが、自己目的と國家目的とを同一視する強烈な精神態度であったと。著者は、この強烈な精神態度は國内統一に有利であったが、最後には傲慢となり、一九四九年には弱みに轉じたとのべる。

〝南京體制のイデオロギー、構造、機能〟では、つぎのように述べている。南京政府を構成した軍人たちは自己勢力の擴大にのみつとめ國家目的をしらなかった。しかし内では分裂していたが、外に對しては一致して反對勢力を抑壓した。そして體制の脆弱さゆえに地主と資本家を同化しようとしたが、南京政府は決して地主階級と資本家階級を代表する政府ではなかったと。なぜなら地主たちは地方分權をのぞんだが南京は中央集權化を求めた。また南京政府の金融をはじめとする企業活動への大幅な介入は、南京政府が企業家を監督したのであり、企業家にコントロールされていたのではないことを示していると。著者はこれを、清末以來の傳統への復歸（官督商辦であろう――北村）だという（一六〇頁）。

〝國民黨の派閥〟の項では、CC團、黄埔系、藍衣社、政學系の各派が要領よく紹介される。そして蔣介石はこれら各派のうえにまたがり均衡をつくりだしていたと。これまたボナパルティストの本領發揮である。さらに藍衣社に代表される蔣介石のファシズムへの傾斜が分析され、蔣介石の儒教重視は決して復古主義ではなく、新しい歩みへの全國民共通の精神的中核を求めたのだとのべられている。ちょうどナチスや、イタリアのファシストが古典主義（ローマ時代風？）に精神的中核を求めたように。

最後に、〝國民黨體制の成果〟以下の三つの項では、つぎのような論が展開される。すなわち南京國民政府の最大の功績は、國土の分裂傾向に歯どめをかけたことであると（一四七頁）。そして共産黨の長征を追跡する過程でその支配は各地に浸透し、四川をはじめとして經濟的影響を擴大させ、最大の成果として一九三六年には南京に對する一大敵地であった廣東をも手にいれることになったと。しかし蔣介石は軍事だけにたよりすぎ、中國の生産力の根幹である農業問題を解決できなかった（一四七―五一頁）。著者は南京政府が力を注いだ工業を中心とする經濟建設には高い評價を與えない。著者はいう。なるほど南京政府は短期間のしかも困難な狀況の中でよくやった。たしかに經濟成長率も高い（一五五頁）。しかし計算のもとになる基數すなわち經濟の規模が小さいので相對的な生長率の高さにもかかわらず國民經濟全體に對する意味は小さいと。さらに一九一二年から一九三六年までの工業生産の伸び率は一定しており、南京政府が存在しなくても經濟は發展する傾向にあったのだとまでいう（一五七―八頁）。

また一九三一年の鑑金廢止や一九三五年の通貨統一も、計畫と實施狀況にはかなりのズレがあり、計畫どおりには作用しなかったとのべる（一五六頁）。

しかし一九三六―七年には二十年來の豐作という農業好況、一九三五年末の銀本位制の廢止による經濟の安定と擴大、國家統一の進展という三つの要因により蔣介石の權威は高まった。そしてこれが〝中國の新しい空氣〟を生みだしたが、一時的なものであったと（一六二―三頁）。

著者は結論でつぎのようにいう（一六五―七頁）。結局のところ南京國民政府は軍事力の上に築かれた獨裁政權であり、人民と一體

化していなかった。南京國民政府はその排他性を排除して國内諸團體のもつダイナミズムを自らの中にとりいれ、政治支配の活性化を圖るべきであった。この措置をおこたったこと、さらに農業問題の未解決がその支配をつねに安定させなかったのだと。そして、これらの要因によっても「國民黨の支配體制は打倒されるものとして運命づけられていたわけではない。しかしこれらの要因は、絶えざる不安定が續くことを意味していた」と結んでいる。

著者の結論に、「中華人民共和國史」のアナロジーをみいだすのは、筆者（北村）のみであろうか。中華人民共和國の現體制がこれらの問題の解決に眞向うから取り組んでいることは、傳えられるとおりではあるが。

さていよいよ第十四章のシュラム論文であるが、これは毛澤東の個人史であり、各章が內容的に連關して展開する本書の中では、ほとんど獨立した存在となっている。毛澤東が中國の近現代史に限りない影響を與えたことからすれば、彼の思想的展開が獨立してとりあげられるのは當然であろう。

シュラム氏は、このシリーズの第十五卷にも本書所收論文の續きとして、「一九四九年から一九七六年までの毛澤東の思想」を執筆している（すでに脫稿ずみ）。

昨今では毛澤東は過去の人となった感がある。一九七八年十二月の中國共產黨十一期三中全會による鄧小平の權力掌握以來、毛澤東を建國の父という權威としてのみ祭りあげ、その思想的內實の方は、これをいかに現體制の原理と衝突しないよう解說し、分析してみせるかが、中國共產黨イデオローグの課題である。一九八一年以降、『毛澤東農村調查文集』、『毛澤東書信選集』、『毛澤東新聞工作文選』、『毛澤東著作選讀』、『毛澤東詩詞選』、『毛澤東哲學批注集』が出版されている。しかし政治的、社會的意義の上からは、毛澤東はもはや天安門上の一枚の寫眞と、「四つの原則」（共產黨支配維持のための金科玉條）の一つである「毛澤東思想の堅持」としてのみ名をとどめるかのようである。われわれは神格化が終った今こそ、毛澤東を中國史いや世界史の中に正當に位置づけなければならない。

シュラム氏は一九六六年に發表した *Mao Tse-tung*（邦譯、石川忠雄・平松茂雄譯『毛澤東』、紀伊國屋書店、一九六七年）以來、日本でもよく知られる毛澤東研究の世界的權威である。一九七九年には客員敎授として京大を訪れ、京大會館で講演をしている。

シュラム氏は中國共產黨が毛澤東解釋をもてあました時期（八一年から八三年頃）、外國（西洋）人の權威として重寶がられ、何度もまねかれて中國を訪れた。そして自らの研究成果を中國語で講演し、中國側の毛澤東處理（?）に大いに寄與した。

昨年の秋、中共中央文獻研究室の研究者三名が京都を訪れた。小生の勤務する立命館大學でも竹內實氏の主催で座談會が開かれたが、その折り中國側からしきりにシュラム氏の名が言及され、しかも中國側は彼をステュアートとファーストネームで呼んでおり、兩者の親密さがうかがえた。

私もこれまで何度も毛澤東文獻の翻譯にたずさわったことから、毛澤東については一應のイメージはもっていた。今回シュラム論文を讀んで感じたのは、氏が最新の資料を驅使してまことに愼重な「毛澤東論」を展開していることである。シュラム氏が依據する最新の資料には、竹內實監修『毛澤東集』所收のものが多い。『毛澤

東集』は蒼蒼社刊。全十巻及び補巻九巻及び著作年表、一九八六年完）。蒼蒼社社主の中村公省氏は昭和五十五、六年に京大人文研より『毛澤東著作年表』（上、下巻）を出している。今回のシュラム論文執筆にあたっても新出の資料を提供した。この點については、ケムブリッジ・ヒストリー第十三巻および第十五巻所收のシュラム論文を合わせてロンドン大學より出版される單行本で、シュラム氏が感謝の辭を呈している。

シュラム氏は、政治學者としての深い學識の上に多くの新しい事實を綿密に組みたて、毛澤東を世界史の普遍性の中で腑分けしている。私は讀みはじめには、なぜこんなにも愼重な（少々回りくどい）議論を展開するのかと、少々いらだちを覺えた。しかし讀みすすむにつれ、地圖に譬えればシュラム氏は平面圖を描こうとしているのではなく、凹凸のある立體圖を組み立てようとしているのだと氣がついた。そうなると、あとは實に面白く讀み進んだ。

若き日の毛澤東のありさまを一言でいうと、最初から外界を呑んでかかっているということである。いろんなものを大膽に呑みこんでは咀嚼し、自らの血肉を作っていく個性の強烈な人物である。そして大變に理想主義的であるかと思えば、他の共產黨員に率先して國民黨との共同行動を實踐するなど（八〇八頁）、その情況において何が必要かつ有效かをすばやく判斷し、直ちにこれを行動に移す極めて現實主義的な人物でもある。

シュラム氏は愼重居士であり、毛澤東の特質を理想主義、現實主義、強烈な個性などと單純に類型化してはいない。しかしこれらの事實は氏の毛澤東分析を讀んでいけば誰しも思い當ることである。私の考えでは、この三つの要素はその後の活動における柱となり、十二分にその機能を發揮する。

ひとつひとつ事例をあげればきりがないのであるが、例えば西安事件後の國民黨との第二次國共合作のあと、一九三八年の十月には毛澤東は再び國民黨への共產黨員の個人加入を提案し、國民黨に加入する共產黨員の名簿を提出するとまで明言した。第一次國共合作時の苦い經驗から蔣介石はこの提案を拒絕したが（八五六―七頁）、この事實などは統一戰線のヘゲモニーを、面子にこだわらず何とかして確保しようとする現實主義者毛澤東の面目躍如である。

毛澤東の理想主義の最たるものは文化大革命であるが、このヒナ型は一九三〇年代初期の瑞金ソビエトでの、毛澤東による查田運動の推進として出現していた。シュラム氏はつぎのように述べている（八三二―三頁）。「……地主や富農という傳統的な權威を與えられており、また文字を知り辯說が巧みであるという有利な條件から、毛澤東はこれらのかつての特權階級は財產構造においてどのような變化（土地改革のこと―北村）が起ろうとも、どのみち農民組織の中で權威ある地位にもどる道を歩むことになるという確信を得た。このような、事態の隱された舊秩序への復歸を阻止する唯一の方法は、農民を草の根レベルで常に搖り動かし、彼らに自信をもたせ、今後は社會の主人であるという確信を根づかせるために、貧しい農民をかつての抑壓者に對する鬪いに向わせることであった……。」この下りを讀んで、私はなぜ文革中に貧農・下層中農協會などが成立したのか、また階級鬪爭は一萬年もつづくなどと毛澤東が發言したのかが、はっきりと理解できた。そして、今日の鄧小平體制下に、人民公社解體後に導入された土地の請負い制度のもとで、やはりかつての地主、富農の一族が經營面で手腕を發揮することが多い

という事實を知ると、事の是非はともかく、毛澤東が文革で意圖した理想主義が「正鵠をえた理想主義」であったとつくづく感じられるのである。

シュラム氏はこのほか、毛澤東の思想の特徴である大衆路線、すなわち大衆の中から意見を集約して黨がこれを具體化し、さらに大衆の中で實踐に移してこれを檢證する工作方法の成立過程とその實體（八二一―二頁）、毛澤東の思想の代表的哲學である矛盾論と實踐論の成立過程の詳しい檢證（八三七―四二頁）、さらにはマルクス主義の「中國化」、すなわち毛澤東思想という思想的ワク組みの成立過程（八四五―九頁）などを詳しく檢討している。これらはいずれも中華人民共和國成立後に出現する事態の基礎をなしており、シュラム論文は、とりわけ中國現代史研究を志すものには必讀の文獻である。

シュラム氏が「結論」の表題を「人民民主的な近代的獨裁」と銘うっているのは、中華人民共和國成立後に出現する事態を端的に示唆するものであり甚だ興味ぶかい。シュラム氏は本文中の「結論」部分においてのみ、dictatorship（中國語の專政、日本語の獨裁に對應する）ではなく、より大きな個人的權力集中を示唆するため、autocracy（中國語の獨裁に對應する。日本語では通常は、專制と譯す）を使っている。氏はつぎのように述べる。「……一九四〇年代の後半になり全國的な勝利が近づくにつれ、すでにみたとおり毛澤東は、あきらかにマルクス主義的な考え、すなわち都市と勞働者階級による指導の必要、および中國の社會と文化を變革するうえで工業化がはたす中心的役割を、一層聲高に強調しはじめた。しかし「封建」文化は本當に廢絶できるのか。また黨は、たとえ情け深くはあるにせよ「獨裁者」（autocrat）の指導のもとで、本當に改革を遂行してより民主的な作風を獲得できるのか。毛澤東が一九四九年に樹立したような「人民民主獨裁」は、たとえそれが傳統的な政治文化における深い變革を含むものであれ、本當に近代化を實現できるのか。あるいはそのような形態の體制は最終的にはその內實を腐敗させ、ゆがんだものになるのか。これは一九四九年に毛澤東が勝利したとき、その政治綱領の上にあきらかに未解決のまま殘されていた問題であった」。

以上の文章はシュラム論文の締め括りとしてのみならず、*Cambridge History of China* の近代史部分の最後に置かれるものとして、眞に當を得たものといわなければならない。

Cambridge: Cambridge University Press, 1986, 23 cm, XX + 976 pp.